

Hide Owl

鍊鉄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ブラックトリガー、オウル。その継承者の物語。

派手さも、栄光も、理想も無い、そんな少女の復讐劇。

何処かで呼ばれた「トリオンモンスター」、その忌み名はここに怪物たりえる猛威を振るう。

ほぼ処女作みたいなもんです。決して上手くはないと思います。それでも見てやつても良いぜって方だけお願いします。

R-15、アンチヘイトはホントに保険です。

は記憶の中の描写です。

文が分かりづらかったらすみません。

長々と失礼しました。では、物語をお楽しみください。

# 目次

i f  
ボーダーハココデ  
――

64

設定資料

1

本編

アノヒノチカイ

6

イマハムカシノサキニアル

12

バケモノトヒト

17

ブラツクトリガー

24

マエトツギ

36

セカイハキヨウモウツクシイ

44

ジンノアンヤク

53

コレカラワタシタチハ

58

I F  
ルールト

# 設定資料

雨取 千佳

この作品における主人公

side effect 敵性感知（独自呼称）トリオン兵やネイバー、ゲートの出現、移動を感知。

trigger 「owl」梟の名を持つブラックトリガー 起動しただけではただ飛べるだけの羽が生えるだけ

シエイプシフトという形態変化を持ち、ハイド、エスケープ、アクロバット、バトルの4種があり、2種までは組み合わせができる。血縁者（サナス）のみ3種の組み合わせが可能。

任意の状態での起動可能。（この状態では一種の形態変化のみ。）

シエイプシフト ハイド ステルス用形態。トリオンの漏出を最大限抑えることができ、オウルを使って警戒区域に潜る際は必須で、一度シフトせずに警戒区域に潜り、ボードーがすつ飛んできた。

シエイプシフト エスケープ 脱出用形態。オウル最初期は起動時即座にこれが発

動した。 トリオン効率は無視し、ある程度の方向性（前後左右）を決めたのち羽が自動操縦状態になり、5 kmほどずつ飛んだあと、自動的にハイドに移行する。

シエイプシフト アクロバット 高機動用形態 羽のサイズが少し小さくなり、文字通りアクロバティックな起動が可能に、また、羽を前に突き出し全回時のトリオンの7割を使用し、ゲートを発生させることが可能、（千佳の場合、そもそものトリオン量が多いので2割弱の消費で可能）

シエイプシフト バトル 戦闘用形態 羽のサイズが一回り大きくなり、羽での殴打、羽の射出が可能に、これとハイドが千佳の基本状態。

サナス

ヒロイン（）

トリオン量は少し多い程度の6、owl起動時21

両目を横薙ぎにするような傷がある。後天的視覚障害。

owlを起動している時のみ、父の遺志か、目が見えるように。

父の指定した座標で周囲を探索している時にowlを発見、起動。

起動したはいいが、最初に設定されていたエスケープシフトのおかげでアフトラトル侵攻を逃れる。

現在は雨取 麟児の所持していたベイルアウトなしの初期のトリガーを使用して生  
活。初期トリガー起動時は傷が消えるものの、視界までは回復しなかった。

### 三雲 修

千佳が庇護対象ではない為、意志が弱く、ボーダーに入ったのも、興味本位。

ボーダー設立当初に入隊したため、トリオン器官が発達し、トリオン量は原作の2か  
ら3へ発展。

かろうじてB級に昇格はしているが、才能の無さを感じ、開発室所属に。現在はトリ  
オン量が少なくても戦えるようより効率のいいトリガーをベイルアウトの効率化を目  
標に研究中。

実は麟児が不法出国を思いとどまったのも、修の驚くほどの大泣きで実現。なお、双  
方恥ずかしすぎるため、千佳には知られてない。

### 雨取 麟児

修の男泣き(?)により、出国を見送った。可能性の1つのお兄ちゃん。

千佳ちゃんはこの場で傷つかなかつたため、修の庇護対象から外れることに。

性格は原作通り、厳しくも優しい理想的なお兄ちゃん。

出国しないことは当日まで秘密にしてたため、実質ドタキャン。

第一次侵攻時、家の崩壊をいち早く察した麟児は咄嗟に千佳を窓から突き落とす形で救出。

少しでも生存率を上げるため、千佳にトリガーを譲渡。

サナスパ

空に憧れた研究者。翼型のトリオン兵を意思操作で再現しようとしたものの、彼の手には余り、アフトラトル侵攻に突入。

下っ端に研究所が見つかったため、護身用トリガーのみ持ち、脱出。トリガー換装をしようとしたところ、認証エラーが発生、体を確認したところ、鉄骨が腹を貫いていたため、死ぬぐらいならと、ブラックトリガーの作成を決意。パパのトリオン量は、研究者にはもったいない、驚異の9。神の嫌がらせか、サイドエフェクトは強化視覚。トリガーの内部構造を瞬時に見抜く目を持ち、研究者へ立候補。しかし、見えたところで、オーバーテクノロジーに変わりはなく、その上、通常トリガーまでしか見抜けず、研究者としては中の上程度で頭打ち。

アフトラトル侵攻



神の死期が近いことを察したアフトが、神探しとトリオン補給のため、ガロプラを侵攻。

出立したのは、ミデン二次侵攻のメンバーからヒュースを抜いたメンツと、下っ端数名。

ガロプラ降伏直前何人かの下っ端とエネドラが、大きな鳥が、トリオンをばら撒きながら、高速で飛ぶのを確認、追跡しようと動き始めた時に、勢いよく散っていたトリオンが急激になりを潜めたため、断念。また、CーKブロック付近で人の塵（ブラックトリガーの痕跡）を発見したため、調停を急がせ、即座に帰還。

なお、その数日後、人知れず、ゲートが発生し、1人の少女が、惑星へ移動した。

## 本編

## アノヒノチカイ

——雨の中、少女が泣いてる。

まだ年端もいかぬ少女が、友人が消えた事に、そして、自分がその責任を問われるかもしれないと言う恐怖に。

\* \* \* ちゃんかわたしと一緒にいたからいなくなっちゃった わたしのせいで違うの わたしそんなことしてない いやだ なんて \* \* \* ちゃん 悪くない わたし ひどい いない

考えがまとまらない

気持ちがおさまらない

足がすくむ

黒い脚…

おや、どうしたのかな？ お嬢さん。

「また、あの日の夢…」

またあの古い夢だ。

「最近はず減ったからもう大丈夫だと思っただけどなあ」

言つて涙を拭く。いつもこうなのだ、あの日の、あの時の夢を見ていつも涙を流している、心が折れそうになっている。

「お顔、洗わないとダメだね。」

じゃないと、お姉さんを起こしにいけないもん。

大丈夫、私もう泣くだけじゃない。助けられるぐらい強くなつたし、支えなきやダメな人もできたから。だから、今日も明るくないと。ちゃんと心から笑つて、\*\*\*ちゃんの分まで生きないと。

「おはようございます、佐奈江さん。」

「うん、おはよ千佳ちゃん。」

稲田 佐奈江さん、本名はサナスさん。まあ、本名で分かる通り日本人じゃない。——というより玄界ミデン玄界の人じゃない、近ネイバーフッド界のヘガロプラフっていう星の人らしい。なんでも旅をしている時に泣いてる私を見て「この子だ！」つて来たらしい。サナスさんの旅の目的はブラックトリガーの継承者を見つける事だったらしい。

まあでも今はそんな事より、

「ご飯出来たので、食べましよう?」

そう、お腹が空いたのである。

「うん、じゃあ今日もお願いなね。」

そう言つて伸ばしてきた手を繋ぎ、移動する。

「ご飯の後ふとお姉さんが

「いつもありがどうね。」

と言つた。

「どうしたんですか？急に改まつて。」

「いえね、いつも私の目が見えないばかりに家事全部押し付けちゃつて申し訳ないなーつて。」

そんな事、気にしなくていいのに――

「ふふつ、良いんですよ？私お姉さんにとつても感謝してるんです、それに恩返ししたくてやつてる事なんですから。」

「そう？でもありがどうくらい言わなきゃと思つてさ。」

「じゃあ、どういたしまして。」

---

お友達が、それは辛いね。

そんな君にお姉さんがおまじないをしてあげよう！

おまじない？

そう、勇気が出てきて、どんな辛い事も、考え事もほんのひと時だけ忘れさせてあげれるおまじない！

そう言った女の人がブレスレットを触って、「オウル、起動」と言った。

キレイなハネ…

それは女の人の背丈の2倍はあるかと思われる程の猛禽類を思わせるソレが、雨あがりの世界ではとても美しく見えたのだ。

そうかい？それは嬉しいなあ、じゃ、ちよつと失礼して…と

ひやっ

わあ、たかい…でも、とつてもキレイ。

でしよでしよ？世界つてすぐ残酷でひどい奴なんだけどこうやって高くから見下ろしてやるとこんなにも綺麗なんだ。

だから、泣くのは少しの間お預けだ。

こんなに綺麗なんだ！楽しまなきや！

たの、しむ…

そう！楽しむんだ！どんなに嫌なことがあつても世界はこんなに綺麗なんだ！

うん、とつてもキレイ

ありがとうお姉さん

---

「オウル、起動」

身体を変えて少ししたら現れるであろう化物を幻視し、睨みつける。

私は、ネイバーの化物なんか、大嫌いだ。

でも、やっぱり今日も

「綺麗」

下の方で黒い孔が空く、白い化物が這い出てくる。

「フッ！」

羽を数枚、化物めがけて射出する。

すると羽は狙い通り化物を捉え、化物が動かなくなる。

「トドメを」

地面に降りて、化物に近づいて、口にある目の様なものにもう一枚、羽を射出。

確実に仕留めないと、被害が出るから。

「化物なんて、いなくなっちゃえば良いのに。」

1人愚痴り、トリガーを解除し、帰る。

「晩御飯、何が良いかな？」

これは、勇敢なヒーロが出てきて、悪者を倒したり、まして勇猛果敢な少年少女が、切磋琢磨する物語ではない。

これは、1人の少女の密かな復讐劇だ。

## イマハムカシノサキニアル

化物を処理した後、晩御飯は何にしようか？などと考えながら歩いていたのが悪かったのだろう。

「あ、千佳ちゃん……こんばんは。」

三雲 修、兄が家庭教師のバイトをしている時に出会った少年、どうも私をあまりよく思わないみたいだけど。

「こんばんわ三雲さん、別に無理に声をかけなくても大丈夫ですよ？」

気まずげな顔をするくらいなら話しかけなければ良いのに。

「いや、別に無理についてわけじゃ……」

---

お兄ちゃん!!!!

目の前で兄が潰れた家の下敷になった。

白い、化物のせいだ。

千佳、無事か？

なんて気丈に振る舞っているがお腹の下辺りから足の先、片手を潰されている。どう



見ても兄の方が辛いはずなのに私の事ばかり気にする。

私は大丈夫：でも、おにいちゃんが

俺の上着の左のポケット漁ってくれ

何を言うのだろうか、今はそんな事をしている場合では

白い、グリップ？これ、なに？

千佳ちゃん!!!!

おねえさん！お兄ちゃんが!!

ごめんよ、もう少し早ければ千佳ちゃんも、お兄ちゃんも両方助けられたんだけど：

千佳ちゃん？それ、トリガー？

え？

トリガー？トリガーって、お姉さんのブレスレットの…？

あんた、それ知ってるのか。

お兄ちゃん？

そうか、それは君の持ち物か、なら、少年 君を助けることはできない、だが、千

佳ちゃんはずらず守り通そう。だから、このトリガーを譲っていただきたい。

もうそれは 千佳のもの だ。俺、がどうこう言えるもんじやない。

息も絶え絶えに、兄が言葉を紡ぐ。

お兄ちゃん！無理に喋らないで！！

千佳ちゃん、少し借りるね。

おねえさんが徐に手を伸ばす。

トリガー、オフ。

発声、そして顔の一部分、それも両目を横に裂くような傷のついたお姉さんの姿が、トリガー、オン。千佳ちゃん、これ付けて呼<sup>起</sup>んであげ<sup>動</sup>て、その子の名前はオウル。

オウル：オウル、起動

あんた、約束、違えるなよ：

勿論だ、彼女は必ず：

視界が薄れる中、そんな会話が聞こえた

フラッシュ、そして違和感。

羽が、美しい世界を見せてくれたそれが、私の背中に生えていた。

「隣児さんにお世話になったんだし、それに…」

そんな言葉を遮るように

「そうですか、では。」

私は言葉を置いて、また歩き始めた。

何より、私が話したくないのだ。

「あっ……」

急いで帰ろう、あの人を見ると、兄を思い出して……

ダツ

走る。うるさい心臓を誤魔化すように、心が折れてしまわないように。

「ハア、ハアツ」

バンツ

乱暴に戸を開け

「おや、千佳ちゃんかい？おかえ……つと」

おねえさんに身体を預けた。

不謹慎ながら、おねえさんが目が見えなくてよかった。

こんな顔を見せなくて済むから。

「落ち着いたかい？千佳ちゃん。」

「はい、すみませんでした、もう大丈夫です。」

「そっか、じゃあ何があつたか教えてほしい、と言いたいけど、辛そうだからそれは良い

よ、でも…」

クウ

「お腹すいたから、何か作ってもらって良いかな？」

ああ、この人は本当に人が良い。いつも、私に気を使ってくれる。

「ふふっ、そうですね。お腹、すいちゃいましたね、ちよつと待っていてください。」

だから、こんな日常を、お姉さんを、きちんと守っていきなきゃ。

## バケモノトヒト

「へ？」

これは、いつもと違う、けれどいつものようなこれは。  
近界民。<sup>ネイバー</sup>

「先生、お手洗いに行ってください」

取り敢えず、今いなくなると問題になるので担当の教師に一言残し、教室を出る。

周りに人は…

「いない。オウル 起動」

すぐに飛び発つ。

ネイバーが全て敵対関係でないとは、頭では分かっている。

でも、敵対関係であるものの方が圧倒的に多いのもまた、事実だ。

バチバチツ

警戒区域外、それも上空にゲートが開く。

「あそこ!!!」

全力で加速する。

「おわっ」

「どうやら座標位置が悪かったようだ、弾印バウンドの使用を推奨。」

「おっけー、バウンド。」

ゲートから黒い人影が落下している。どうも飛行型のトリガーではなさそうだ。

「まずは、対話から。それで、四年前の国なら…」

必ず、仕留めない」と

「ふむ、ここが親父の故郷か。」

「観光はいいがまずは避難を優先すべきだな、事前に調べてはいるが、まだ不明瞭だ。」

「遅かったみたいだぞ。」

「なっ!」

1組のネイバーのもとに現れたのは、翼を持つ、少女だった。

「化物も…?」

とにかく、確認を

「こんにちは、時間がないので、端的に。貴方は、こっちに何をしにきたの？」

「どうやら、少女は対話を求めるようだった。」

「もつとも、十分すぎる警戒をその羽が示しているが。」

「どーも。」

「はじめまして、私はレプリカ。」

ズドンッ

レプリカの横を何かが通り過ぎた。

レプリカの横を通り、後方に撃ち込まれた羽は、5、60cm程地面を抉り、鎮座していた。

「化物に、話はしていない。」

化物はイラナイ

「ごめんごめん、ソイツ、俺のお目付役なんだ。んで、来た理由だったよね。」

少年が、一呼吸置く。

「オレの目的はボーダーに接触する事、理由は…：教えられないけど、少なくともコツチの人を襲ったり攫ったりするつもりはないよ。」

羽を首に回す。

「……」

嘘では無い、と、思う。

「そうですか、なら、早く済まして帰ってくださいね。」

危害を加えないなら、殺しちや、ダメ。

「いいの?」

思いの外、あっさり許された。もっとしごく聞かれると思ったんだけど…

「貴方は、嘘をついてる目をしなかった。から、いい。」

「ああ、私のことは、誰にも言わないデ。」

ボーダーに構ってる程、私は余裕はない。

「じゃあ。」

早く、戻らないと。

羽を強く打ち、一気に上昇する。

「なあ、レプリカ。」



「ああ、完全な飛行だ、跳躍や、噴進などではなく、間違いなく飛翔とんしている。」  
「ミデンの進化はメザマシイだな。」

レプリカは反応しない、いや聞いている様子はある、ただ、考えがまとまらないよう  
だ。

「……」

ああ、私は、飛べなかったか…

科学者のような男が、壊れた己が身体と、武器を見ている。

サナス、こっちに來なさい。●ー●ブロックを左だ。

もうこの国は、墮ちるだろう。

最後まで、父親でありたいなど…私もまだ…

生きなさい、サナス…

1人の男が塵にかわり、黒いブレスレットが塵の山に残っていた。

「ユーマ。」

「お、何か思いついた？」

「アフトクラトルの戦士が、かつてブラックトリガーとなつた遺体が、ガロプラであつたと言つていた。」

「…」

「そして、ガロプラ服従の日、空に大きな鳥が飛ぶのを見たそうだ。」

「それこそ、成人前の女性の体長程度の大きな鳥が。」

「ナルホド、俺たちは事実、見逃されたつて事か。」

「急ごう、少女の気が変わらないうちに。」

「…であると考えられている。」

ガララッ

「雨取、もう大丈夫か？」

「この学校は教師が随分気に掛けてくれる。多分どこかでお兄ちゃんを目の前で失つたのを聴いたのだろう。」

「ええ、もう大丈夫です。ありがとうございます。」

「そっか、体長悪いんなら無理すんなよ。」

「はい。」

さて、私はこの授業の部分がテストで出たら、きちんと答えられるだろうか？  
重要な問題を聞けてなかったらどうしよう…

これも、化物のせいか!!

## ブラックトリガー

「ゴーストをかけた青年が、白い少年に問いかける。

「ねえ、遊真さん、ボーダーに入んない？」

少年は考える。目的の目処はまだ立っていない。だが、彼はボーダーにいるという。「とりあえず話だけでもいいからさ。」

「そうか、ソレナラ

「オサムも一緒ならいいよ。」

「来まりだね。」

とても嬉しそうに笑顔を少年に向ける。

---

俺が死んだらミデンに行ってボーダーって組織に行け。  
そんなでもって最上に会いに行け、助けは出してくれる。  
モガミ？

そう、最上だ、アイツならお前の身の上を知っても悪いようにはしねえ筈だ。

「ホウ、どら焼き。」

どうもこの柔らかく、甘い匂いのするものはどら焼きというそうだ。

お、ウマイ。

お茶？ありがとう。

「遊真さん、ボスが話せるってさ。」

ボスという人が帰ってきたらしい。

「うん、今いくよ。」

「メガネくんも来てね。」

え？ボクも？

「あ、はい！」

支部の中歩いてたらジーンがドアの前で止まった、ここなのか、ボス

コンコンッ

「失礼します、2人を連れてきました。」

ジンが敬礼をする。

ボーダーって軍隊なの？

「おつきたな、おまえが空閑さんの息子か。はじめまして。」

「どうも。」

「おまえ、親父さんの知り合いに会いにきたんだろ？その相手の名前はわかるか？」

「モガミソウイチ、親父が言っていたのはモガミソウイチだよ。」

少し、ほんの少しボスの空気が沈んだ。

「そうか…やっぱり最上さんか…」

レプリカ（小）に聞いた話だどうも空閑は父親をブラックトリガーから蘇らせることが目的だったようだ。

だが、それも先ほどの風刃、最上宗一の例で、現行は不可能だと知った。知ってしまった。

「オレはむこうの世界に帰るよ。こっちにきた理由はもうなくなった。これ以上いてもゴタゴタするだけだからな。」

でも、だけどほんの少し、帰りたくないなんて思ってしまった。

「けど、この何日かは面白かったな、ひきびきに楽しかった。」

でも、ちゃんと帰らないと少女がどういう手で報復するかわからない。

「そっか、帰る日くらいは教えてよ、見送りくらいにするから。」

ジンと話し終わって階段を降りたら、意外な事にオサムに引き止められた。

でも、止められる訳にはいかない。

「すまん、そうもいかないんだ。」

「なんでっ…」

「用事を済ましたらすぐに帰れって言われて領いちゃったから。」

「じゃ、じゃあ、またこっちに来れば…」

そうはいかないだろう。彼女が見ているのだ。また来た時、その時に彼女が許してくれる保証はない。

「そんな、捨てられた犬みたいな顔するなよ。」

一緒にはいてやれない。でも

「もし困ったら、ネイバーフッドにきてオレを探せよ、その時は今度は俺がオサムを助け

てやる。」

オサムには悪いけど、それ以上はしてやれない。

だから、できる事ならなんだってやってやる。

「今度のニチヨウビ？に帰るから見送りに来てくれると嬉しいんだが、いいか？」  
「ああ、もちろんだ。」

「ヤッホー遊真さん、こっちでやりたいことは全部やった？」

ジンがいつもの服で何か食べながらこっちに来た。

「うん、大体終わったよ。」

「そっか、ぼんち揚食べる？」

ぼんち揚って言うのか

「イタダキマス。」

サクサクしてうまい。

「あと一時間もすれば軌道が最も近くなる、頭に入れといてくれ。」

レプリカから報告が入る。

「オツケー、しかしオサムはまだか。」



オサムが来ない。確かに一緒にいることは断つたが、まさかそれで約束を放り出すとは思いいくいが…

「ご、ごめん、完全に、寝坊っ、した！」

オサムが走ってきた。なんだ、寝坊か

おわつ、ハアハア言ってるどんだけ運動できないんだ。

「ハハハッ、オサムはもつと運動したほうがいいな！」

「まあ、時間少しあるっぽいし珈琲でも飲む？」

ジンがキツサテンを指差して言う。

「ハア、ハア、お、お願いします。」

バテ気味のオサムも賛成する。

チリンチリン

「アイス珈琲3つとサンドイッチを…メガネくん食べれる？…3つで。」

食べれるのか？オサム

「さて、…

話しているとレプリカが、

「ユウマ、窓の向こう、ビルの上に彼女がいるぞ。」

「キチンと見送らないと信用できないってことか。」

まったく、恐ろしいもんだ。

「ユウマさん、彼女とちよつと話してもいい?」

ジン? まあべつに俺は問題ないケド

「いんじゃない? あつちが話してくれるかわかんないけど。」

「そこは大丈夫、俺のサイドエフェクトがそう言ってる。」

そうか、そんな未来が見えたのか。

あれ? もしかしてジン俺の見送りよりそっちメインじゃない?

まあいいか

「ボーダー…それも、一時侵攻のときに見た気がする。」

---

こいつらの事は任せてほしい。

我々はこの日の為にずっと備えてきた。

「フンツ、鍛えた牙も守り通せなきや意味はないじゃない。」

少しの怒りを滲ませ、相手を観察する。

「さて、じゃあそろそろ出よっか、レプリカさん、帰る場所の希望とかはあるの？案内するよ？」

提案するが、レプリカに場所でどうこう言われた記憶はない。

「いや、こちらはそう言ったものは特にない。ただまあ、人目はない方がありがたいな。」  
「オツケー、じゃあ警戒区域でしよっか。」

彼らが動き出した、どうも人気のない方に向かっているのでこれから送り出すのだろう。

「オウル、起動。シエイプシフト、ハイド。」

トリオンの漏出をできるだけ抑えて飛ぶ。

「この辺で良いだろう。」

レプリカは空を見上げて、

「ユウマ、彼女に降りるよう促してくれ。」

「オツケー、おーい！」

空を仰ぎ、手を振る。

すると、

ヒュンツ

鋭い音がしたと思ったら、彼女が降りてきた。

「な、千佳ちゃん！」

オサムはどうやら知り合いだったようだ。

「……」

あれ？オサムのこと思いっきり無視してるけど、オサム何かしたの？

「帰るんですか。」

俺に問いかける、やっぱりオサム無視されてんじやん、相当嫌われてるんだな。

「ああ、目的は達成できなかつたけど、もう用はこつちにないからね。」

「そう、それで私のことは？」

「誰にも、いや正確にはそのジンって人が話せるかどうか聞いてきたから、まあアンタ

がいいならできるだけんじゃない、くらいは言ったけど。」

「ジン？」

そんな知り合いはいないはずだが、と言うかそもそもボーダーの人間なんて関わっていないのだが。

「どうも、はじめまして、迅 悠一です。少しお話し、いいですか？」

…

「少しだけです。」

おや以外、少しなら話してくれるんだ。

「少しですか、ではまどろっこしいのはなしで、

ボーダーに入りませんか？」

乗ってくれれば、大変嬉しいんですけど…

少女は、

「こいつらの事は任せてほしい、我々はこの日の為にずっと備えてきた。」

それは、

かつて自分達が言った市民への宣誓

「引きこもって備えていた貴方達は被害を想定よりも随分、減らした。」

でも、足りなかった。

貴方達の力では守れない。

守れない防衛組織になって、入るつもりはありません。」

ああ、どうも

「随分嫌われてるなあ、確かに、俺たちは全てを救うことはできなかった、だから今、全てを守るだけの力が欲しい、戦力が欲しい。」

未知のトリガーを遊ばせたくはない。

ズドンッ

迅の足元に刺さった羽にレプリカがちよつとビビった。

「できなかつたことに対する反省、次回策を練るのはいいことです。」

確かにいいことだ、だが。

「でも、私には関係ない。」

そう、全てなんて私は守れない。だから、自分とお姉さんさえ守ればいい。「全てを守りたいなら私抜きでやってください。」

私には関係ないのだから。

## マエトツギ

関係ない

確かに彼女には自分たちの行動なんて関係ない、実際彼女は4年間ボーダー保護されたと言う記録はない。

「確かにそうだ。だが、君のご家族の事はどうする？君だけで守りきれれるのか？」

少女が叫ぶ

「家族は貴方達のせいで…!!!」

「あ、あの迅さん…千佳ちゃんの家族は第一次侵攻で皆さん、家の倒壊に巻き込まれていきます…」

呟くようにメガネくんが僕に伝えてくる。

しまった、それも地雷か…

「君のご家族の事はどうする？君だけで守りきれれるのか？」

迅さん、それは無理です。千佳ちゃんの家族は第一次侵攻で皆さん、家の倒壊に巻き



込まれています…

「ユーマ、時間だ。」

レプリカが修羅場（？）を前に平然と言う。

いや、この場合は一刻も早く離れたいのだろう。

「そうだな、途中だが帰らなくてレプリカに手出されるとオレが困る。」

オサムにきちんと礼は言えていないが、いつかまた会う時があるらしい、ジンが言うてた。

だから礼はその時でいいだろう。

「じゃあレプリカ、ゲートを…」

「貴方達のせいだ…!!!」

彼女が絶叫した。

何か良くない事を言ったのだろう。

「…どうする？レプリカ。一言ぐらい言っ行って行くか？」

相棒に今日も助言を求める。

「それを決めるのは、やはりユーマ自身だ。」

だな

「ヨ、オレそろそろ帰るから一旦そこまでにしてもらっていい?」

白い子が呑気に言う。

「それと、余計なお世話かも知んないけど、ジンのせいじゃないってのは気付いてんだろ? その辺にしといた方がオマエも傷つかなくて済むぞ。」

私は驚いた。

もう帰るだけの人間が私を心配したことに、私の意地を見抜いた事に。

そして、悲しく、恥ずかしく、やりきれなくなった。

確かにあれは彼らのせいではない。でも、彼らの力が足りなかったのもまた、事実だ。

「……知ってるよ、そんな事。でも! それじゃあお兄ちゃんがっ…」

「千佳ちゃん、隣児さんは、千佳ちゃんを助けて死んでいったんだろう?」

三雲さん…何を知った風に…

「一度だけ隣児さんは千佳ちゃんを見捨てようとしたことがあるんだよ? でも、心の中では捨てきれなかった。千佳ちゃんの事を見捨てない道を選んだ。そんな隣児さんだ、きつと最後だって千佳ちゃんを見捨てなかった、ちがうかい?」

お兄ちゃんが私を…？

「なんでそんな事アナタが知ってるんですか、そもそもそれが本当かどうかも…」  
「そうだ、三雲さんが口からでまかせを言っている可能性だって

「いや、オサムは嘘ついてないよ、オレのサイドエフェクトが証明する。」  
「白い子のサイドエフェクト？」

「サイドエフェクト？」

「そ、オレはウソが分かるんだ、オサムはさつきウソついてなかった。」

「じゃあ、本当に兄さんは、でも、どうして

留まったのだろうか。」

修、俺があっちへ行ったら千佳のこと、頼むぞ。

なんでもないように、隣児さんが言う

「何言ってるんですか！僕が千佳ちゃんをだなんて！無理ですよ！僕は、僕は力がないですから…」

「そう言うなよ、頼むよ」

「無理ですよ！！だいたいそんなことしたら千佳ちゃんが泣いちゃうじゃないですか！

それに、それにご家族だって！！」

呟く彼女の答えに少しオサムが何かを隠しながら

「それは…僕が千佳ちゃん的面倒を見れると思わなかったから素直に隣児さんに留まるようにお願いしたら、なんとか残ってくれるって。」

言った。おそらくそれ以外に何かしたんだろう。

「……」

彼女は黙ってしまった。

「雨取さん、俺達の事に雨取さんは確かに関係ない、だからもう一度やり直させてくれ、」  
今まで黙っていたゴークルの人が話しかけてくる。

「暫くしたら、もう一度大きな侵攻が来る。その時に被害を0にしたい、その為に雨取さんの力を貸して欲しい。報酬も用意するし、匿ってる女性に關しても保護、もしくは無干渉を約束する。だからどうか、一度だけ、力を貸してください。」

ゴークルの人が頭を下げる。

バレていた、その事に千佳は頭を取られていた。隠しきっているつもりだった、だが

実際はそうでなかった。

「……」

だが、幸いにも無事は保証してくれる、いや、領けば、保証される。

「……条件があります。」

絶対に下手は踏まない。

「まずは白い彼、彼の協力を得る事。」

白い子を指差し言う。

恐らくだが、彼のトリガーは私と同じ、ブラックトリガーだろう。

確認しただけでも3つ、それだけあれば守り通せるかもしれない。

「ム？オレ？」

「そしてもう1つ、あの人には無干渉でいてください、これまでのデータも、これからのデータも全て消してください。あの人は居ません。居てはいけません。ボーダーになんて見つかっていません。この2つを約束するなら、次の侵攻、私の事は戦力としてみて構いません。」

遊真さんを？

「そしてもう一つ、あの人には無干渉でいてください、これまでのデータも、これからのデータも全て消してください。あの人は居ません。居てはいけません。ボーダーになんて見つかっていません。この2つを約束するなら、次の侵攻、私の事は戦力としてみて構いません。」

それはもとより司令に許可はもらっている。

「わかった、その条件を飲もう。どうか力貸してください。」

「…ええ。」

良かった。協力は得られそうだ。

じゃあ後は…

「遊真さん、」

彼に向く

「イイヨ、オサムを置いてくのはちよつと気が引けてたし。 それにオレが急いで帰る理由もなくなつたしな。」

ハハ、即答か。全く、俺の苦労は…

「そうか、ありがとう。」

これなら、誰もも死ななくて済む。

さあ、後は雨取さんのトリガーの性能テストだな。

# セカイハキヨウモウツクシイ

「トリオン体活動限界、戦闘終了。」

無機質な声が響く。

「いやー、分かつてはいたけど飛ばれたら風刃は打つ手無しだなあ。」

電柱を辿って刃を伸ばしても距離があるために、羽で打ち消され、地面に近づいた時に地を這わせてみても上昇されてかわされる。未来視を使っても打つ手無し、完全に相性負けしている。それに、

「地力が違い過ぎる。その羽一体何枚飛ばせるんですか。」

「実際に試したことないですけど、一日中打ち出し続けても大丈夫だと思います。前の所有者は半日も打ち続けたら終わった上にリロードが必要だったそうです、私は今のところリロードが必要だとは感じてないですけど。」

「だそうだ。機能的に風刃に似ているが本質が違う、風刃が一発一発が威力が高い代わりに弾数が少ない。そして飛べない。」

「いや、たとえリロードがあっても飛べる上にシェイプシフトの機能で回避が容易に出来るとなれば十分規格外だと思っんですけどねえ。」



天羽もそうだが、ブラックトリガーの性能の違いが凄い。  
文字通り格が違う。

特にあの羽、一見飛べる事に目が行きがちだが、真に驚異的なのはなんととってもシエイプシフトだろう。形態によって羽が変化し、対応する。まさに規格外ブラックトリガーだろう。

雨取さんはボーダーではS級隊員として扱われます。

待遇は月給制、福利厚生の一環として要望のあったベイルアウト機能付きのトリガーを二つ支給します。また、雨取さんが保護しているネイバーの方は、此方での戸籍を与え、家屋はトリオンで構成したものを、との事でしたので新しく用意致しました。そして戦績により、別途手当が付きます。ボーダーの組織人としての扱いが受けられます。

また、緊急の呼び出しには出来る限り最優先でお願いします。

そして目下の最優先事項はご自身のトリガーの性能把握と戦術の確立、そしてトリガーの訓練をお願いします。

他にも項目はありますが大きな事項この辺りです、こちらの書類に詳細を記してありますので、目を通しておいてください。

では、これからはボーダーのS級隊員、雨取隊員と呼称します。

今後のご活躍に期待しています。

女性に大まかな説明を受け、外に出る。

お疲れ様、雨取さん。長話の後でなんだけどメガネ君が話しあるみたいだからちよつと付き合ってもらっていい？

迅さん、認識通りブラックトリガーの保有者で、サイドエフエクト「未来視」を持つボーダーのS級隊員。趣味は暗躍らしい、勝手にしていたきたい。

…三雲さんですか、いいですよ。

彼に会うのはまだ少し抵抗がある。どうしても兄の顔を思い出してしまう。

良かった、じゃあ行こっか。

こんにちは、メガネくくん、雨取さん連れてきたよ。

呑気な声で三雲さんを呼ぶ。

あ！千佳ちゃん！ネイバーの方って目が見えないんだよね？確か。

お姉さんの話ですか、しかしそれを確認するためにわざわざ呼んだのだろうか？

そうですね。

実はね、ネイバーの方にトリガーの医療転用の被験者になって欲しいんだ、今のところ心肺機能の問題は解決できることは確認できたんだけど視覚不良の方へのテストが保留されたままなんだ、これが成功すればネイバーの方は千佳ちゃんのとリガーを使わなくてもまた目が見えるようになるんだ。どうだろう？この話ネイバーの方に通して貰えるかな？

お姉さんの目がブラックトリガー無しで…？

それは…可能性としてはどの程度あるんですか？

確定ではないけど、理論上では80%を超えてるからかなり高い可能性でもう一度光を取り戻せると思う。

なんて迅さんの嘆き(?)を聞いてるうちに時間は6時になるうかと言う時間だ。

「今日もありがとうございました。そろそろ時間なので私はこれで帰りますね。」

帰ってご飯を食べよう、最近家は家に帰るのがとても楽しみだ。

「そっか、もう暗くなる時間だね。こちらこそありがとう、気をつけて帰ってね、なんなら支給のトリガー起動しても良いからね。」

「はい、ではお疲れ様です。」

そして私は玉狛支部を出た。

「ただいま、サナエさん！今日のご飯は何ですか？」

エプロンをつけ、キッチンに立つお姉さんに話しかける。

「おかえりく千佳ちゃん、今日はお魚だよ。お魚屋さんで鯖を見て一目惚れしちゃった。」

修さんの提案にお姉さんは頷いた、そしてトリガーを起動してる間だけ、お姉さんはもう一度世界を眺められるようになった。

「お魚ですか、楽しみです。」

本当に楽しみだ。ここ最近はお姉さんの提案でご飯を当番制にした。意外にもお姉さんは対応力が高く、慣れない魚なども直ぐ扱えるようになった。羨ましい。

「ご馳走様でした。」

「千佳ちゃん、今日もまたお願いしていい？」

お姉さんはもう一度目が見えるようになってからはちよくちよくオウルで空へ連れて行って欲しいと言うようになった。

「ええ、勿論です。また見に行きましようか。」

「オウル、起動。」

「うーん、やっぱり千佳ちゃんの羽いつ見てもおつきいね。」

お姉さんが目が見えるようになってから分かったのだが、私の羽は体格差を考慮してもお姉さんの羽よりいくらか大きいらしい。

「そうですかね？まあ、おかげでお姉さんと一緒に空を飛べるんで全然良いですけどね、さ、どうぞ。」

手を差し出す。

「ふふ、よろしくね。」

さあ、今日も飛ぼう。

これまでこの世界は残酷な事が多く、とても酷い存在だった。いや、これからもそう

なのだろう。

でも、それでも今日も世界は

「綺麗だね。」

「はい、とっても綺麗です。」

本当に美しい。

「沙奈江さん、予知では今日、大規模侵攻が起きます。ベイルアウトが付いているとはいえ、今日はボーダーの私の部屋で過ごしてください。暇つぶし用に本とか持って行ってください。それと少し早く出るので一緒にボーダーへ行きましょう。」

そうだ、下手は打たない。絶対にお姉さんの安全は確保する。その為にS級隊員としてボーダーに所属しているのだ。

街の人は二の次。一番はお姉さんだ。

「わかった、じゃあお昼ご飯はコンビニかどこかで買ったほうがいいかな？」

「いえ、ボーダーの私の部屋に電話があるのでそれで本部の方に言えばお昼は大抵のもの食べられるので食べたいものがあればそっちで大丈夫ですよ。」

「そっか、至れり尽くせりだね。さすがS級隊員。」

ふふふふ、そうなのだ。私のS級隊員はお姉さんの為なんです。

「ふふ、すごいでしょう？だから今日はゆっくりしててください。」

「じゃ、行きましようか。」

鍵をかけ、歩き出す。

さあ、今日が大規模な侵攻だ。気を抜かないようにしなければ。

なにせ今回の侵攻の候補にアフトラトルが存在する。

大丈夫だとは思うが、万が一なんて言葉もある。

保険に保険をかけるつもりで居ないと守れない。

「じゃあ私は学校に行ってきますね。」

「うん、行ってらっしゃい千佳ちゃん。」

お姉さんが手を振ってくれる。嬉しい、頑張ろう。

ゲート発生、ゲート発生。

非番の隊員はすぐさま目的地へ移動、戦闘を開始してください。  
無機質な声が携帯端末から響く。

「先生、生徒を連れて避難してください。」

「まて！千佳ちゃんはどうする気だ！」

動揺した先生が私を心配してくれる。優しい人だ。

「私は、ボーターです。早く、避難を。」

「ぐ、わかった！必ずまた学校に会いよ！」

それは、もちろん。

「オウル、起動!!」



## ジンノアンヤク

どうも最近正体不明のブラックトリガーの情報を城戸さんが掴んだそう。この召集もその回収目的だろう。

だが、今回のブラックトリガーは未来が広すぎる。なぜボーダーに入ってくる未来とブラックトリガー全てを没収された上ボーダーが壊滅状態にされる未来がかなり近い確率でしかも高い確率で出るのか。

「迅です、失礼します。」

ほう、流星はブラックトリガー、勢揃いだ。唐沢さんまで呼びつけたのか。

「S級隊員迅、召集に応じ参上しました。」

「挨拶は良い、まずは情報共有が優先だ。座れ。」

城戸さんダイブ気合入ってるなあ。

シツレイしまーす。

「まず今回呼びつけた理由は把握しているな？」

「はい。」

ブラックトリガーですもの、流星にメールは読みますよ。

さつき読んだけどね。

「よし、今回のブラックトリガーについてお前の意見が聞きたい。いや、こちらが手を出した場合、どうなるかを、だ。」

「今回ははつきり言つてやばいです、可能性が広すぎるためとりあえず一番良い未来と悪い未来を。」

「良い未来を辿ると、ボーダーに2つのブラックトリガーが入団し、防衛に協力してくれます。」

「なにに？ブラックトリガーが二つだと？それに、それ程の未来がありながら可能性が広いだと？どういう事だ。」

まくし立てる鬼怒田さん。あんまり怒っちゃハゲが進むよ？

「やかましいわ！」

おっと、口に出てたらしい。

「では迅、悪い未来であればどこまで被害が出る。」

「それですが、まずボーダーが壊滅します。」

…

沈黙が生まれる

そしてそれは幾人か、いやほぼ全ての人間の口から出た言葉は…

「「はっ。」」

である。

「ボーダーが壊滅!?司令!今回のブラックトリガーは諦めるべきです!確かにメリットは大きいですが、失敗した場合のデメリットがかいなんてものではありません!壊滅ですよ!?!下手に手を出すべきではありません!!」

「しかし、ブラックトリガーが2つだぞ!!現状この世界にブラックトリガーが2つも野放しにされているのなら有効活用すべきだろう!!」

根付さんの意見に鬼怒田さんが強く反抗する。

「だから、それはうまくいけば、の話です!ボーダーが壊滅などすれば一般市民に犠牲者が多く出てしまいます!目先の欲より長い目で見た安定をとるべきでしょう!?!」

根付さんも負けじと言葉を投げる。

「御兩人、落ち着いてください。迅、我々がそのブラックトリガーに手を出さない場合、被害は出るのか?」

「いえ、根付さんのいう通り、こちらから手を出さなければ一つはネイバーフッドへ帰還、もう一つも我々とは関わりなく過ごします。」

俺の回答に忍田さんは満足したのか、

「よし、ならば司令、私も今回はスルーすべきだと進言します。ボーダー壊滅の可能性が

あるならば手を出さず、見送るべきです。」

やはり忍田さんは見送る事を選ぶか。

「迅、先程「まずは」と言ったな？ならばほかに被害があるのだな？」

流石司令、冷静だね。

「はい、悪い場合、まずボーダーが壊滅し、その上で現存するとブラックトリガー二本を奪取された上、2つ、合わせて4本のブラックトリガーがネイバーフッドへ渡航します。何より、今回この2人に協力を得られない場合次の大規模侵攻で被害がかなりでます。こちら最悪の場合ですと、1000をゆうに越えます。」

「決まりだ、迅、その2人をなんとしてもボーダーへ迎え入れる。」

司令の決定に1人を除き不承不承ながらも納得する。

「な!?司令!!ネイバーをボーダーに入れるのですか!?!」

秀次がやはり反応する。

「三輪、お前の怒りも知っている、だが、我々はあくまで防衛組織だ。防衛に必要なならば、ネイバーであろうとなんであろうと使う。反対は、許可しない。」

やはり司令は根本ではそう変わってないらしい。

秀次も流石に司令にここまで言われれば黙ってしまった。

「迅、必要ならばある程度向こうの条件は呑んで構わない。成功すれば貴様の要求も1

つだけ聞こう、無論限度はあるが。」

さっすが気前のいい事だ。

「ボス。」

ボスならきちんと俺の意思を尊重してくれるだろう。

「おう、こつちも尽力する。やりたいように、やれ。」

愛してるぜーボス

「オツケーボス！」

今日も、彼は趣味を成す。

## コレカラワタシタチハ

「ミラ!!!」

「たいちよ……」

ワープの女の体を2本の斬撃と複数の羽が刻み、貫いた。

大煙幕、女の生身が晒される。

「まだ。」

さらに5枚、羽を女に射出する。

「アレクトール!!!」

ハイレインが自らの護り分も含めてほぼ全ての弾をミラの護りに向けた。

そこにまるで測ったように斬撃が二本、

大煙幕

ワープ女を護れたが、代償は大きく、隊長格までトリオン体を失ってしまう。

ザンツ

超高空から地上に戻り、

「トリガーオフ、トリガー、オン」

オウルを解除し、配給されたトリガーを起動する。

「エスコード。」

各5枚、都度10枚のエスコードでブラックトリガー使い2人を箱のように囲い、捕獲する。

「本部、こちら雨取、ブラックトリガー二本の捕獲、無力化に成功。回収をお願いします。迅さん、サポートありがとうございます。」

本部に回収を要請し、的確に刃を飛ばしてくれた迅さんにお礼を言う。

『いやいや、こちらこそ助かったよまさか予知で一番早い未来をたどって黒トリガーを捕獲するなんて流石ですよ。』

通信越しにきちんとお礼は言えたようだ。

ブロロロロロ……

遠くから木崎さんが来るのが見えた、どうやら捕獲後の移送も気を使うようだ。

「雨取さん、お疲れ様です。後は俺たちに任せてほかの戦線へ援護に行ってください。」

いつも玉狛支部へ行ったときにも思うのだが、この人はなかなか距離感を感じる。やはりS級である事が絡みづらいのだろうか。

「はい、後はお願ひしますね。では。」

でもとりあえずはほかのブラックトリガーの元へ行こう。

「エスクード。千佳さん、トリガー変えても大丈夫ですよ。」

烏丸さんに伝えられ、トリガーを換装する。

「トリガー、オフ。オウル起動。」

お姉さんの羽を携え、飛翔する。次は凄まじく早い剣を操る老人だそうだ。

雨取さん、今度の侵攻ですが、ほぼ確実にブラックトリガーがくると思います。沙奈江さんの話であったワープロトリガー、トリオン拘束トリガーこの2つは確実ですのでこの2つを優先してほしい。

迅さんは未来予知で今回の侵攻の内容をかなりの精度で把握できたそうだ。なのでわざわざ玉狛支部に人を呼び、指示を呼びかけているらしい。

わかりました。私のノーマルトリガーは今のところセットされているのはアステロイド、レイガスト、スラスター、ダミー、シールド、エスクード、カメレオンの7つです。それ以外に必要なものはありますか？

そうだね、出来るだけ無力化に勤めて欲しいからエスクードをメインでも1つ入れて



欲しいですね、万が一サブを使いながら捕獲、となるとエスクードが使えないのでどちらでも使えるようにお願いします。

わかりました。

『えー、今回の大規模侵攻の被害は、皆様のご協力のおかげで軽傷者が出はしましたが、重症者、および死者は0名での防衛に成功いたしました。これは我々の努力だけでは決してなし得なかった事であり、皆様のご協力誠に感謝しております。さらに、我々は今回の侵攻を糧にし、より高度な防衛システムの構築を目指します。これの達成にはまだ我々には足りないものがあります。それは人員です、我々ボーダーは市民の皆様にもう一度呼びかけます。ボーダーの入隊、スポンサー提供は順次行なっております、皆様のご協力を心よりお待ちしております。つきましては専用ホームページ、または…』

テレビで白髪の細いおじさんがマスコミに向けて今回の侵攻の報告をしている。

「雨取さん、今回の防衛で特別報酬が出るんだけど…雨取さん？」

「あつ、はい！なんですか？」

少しぼーっとしていて迅さんの話を聞いていなかった。

やはり防衛とは言え人型のネイバーに緊張していたのだろう。

「えーつと、防衛の報酬のお話だね、雨取さんには特別報酬それも特級戦功が出てるよって話。雨取さんにはお金と今後の生活の負担、それと沙奈江さんの目の治療に関して良いとこの病院を紹介してくれるってさ。」

「病院…ですか？ 眼球の治療は今の医療技術では不可能なはずでは？」

「一般の病院ではそうなってるんだけどね、ほら、沙奈江さんが今使ってるトリオン体あるじゃん？ あれの更に発展版としてトリオンの医療活用つてのが昔から研究されててね？ その病院で治療を受けてみないか？ つていうのがきてるよ、今の所お客さんはスポンサー以外では沙奈江さんが初めてになるけど…受けてみる？」

それは…

「お姉さんに聞いてからになりますけど、たぶん、お世話になると思います。」

いつまでも見えたり見えなかったりする生活はお姉さんにして欲しくない。

「オツケー、じゃあ本部には検討中って返答しとくね。」

「千佳ちゃん、準備いい？」

耳につけた通信端末から聞こえる声に返答する。

「はい、いつでも大丈夫ですよ、沙奈江さん。」

トリガーを起動し、空を見上げる。

お姉さんは目元の傷こそ消えなかったが、すっかりと目が見えるようになった。なんでもトリオンで眼球の一部を補強、修復し、同化させたそうだ、よくわからない。

「じゃあ今日も防衛任務がんばろー!」

「はい! S級隊員雨取、防衛任務を始めます!」

大きく翼をはためかせ、地を見下ろす。

「視界共有、うひゃー、いつみても綺麗だねー。」

まあ、ともかくお姉さんはトリオン体でなくてもまた、世界を眺められるようになった。

お姉さんと視界を合わせ、視界いっぱい広がる世界を見下ろす。

そして今日も思うのだ。

「はい、今日も世界は、とっても綺麗です。」

## I F ルート

## i f ボーダーハココゴエ

貴方達のせいだ!!!

アナタ達の牙じや届かなかったくせにつ…!!

シエイプシフト! バトル!!!

目の前で少女の羽が一際大きくなる。

なっ! 風神起動!

まずい、掛ける言葉を間違えた。そうだ、事前に調べ流べきだったんだ。よりもよつて脅すような真似をしてしまった。完全に未来が変わった、もうボーダーは、これでは街など守つてなど…

大きく横に薙いできた羽を風神で受け止める。しかし止めた羽がさらに蠢き、羽を数枚射出してくる。これには避けきれず被弾、運悪く横腹に大きな穴が開き、右脚の伝達神経がやられた。

もう私達に構わないで。

脚と腹にダメージを入れた後、空高く舞い上がった彼女が言った。

すまなかった！あのような言葉をかけてしまったが、俺たちは街を守らないといけな  
いんだ!!!

そんなの、知らない!!!なんで今さら私に構うの！今まで通りほつといてよ!!!

今度は両の翼から先程とは比にならない量の羽が飛んできた。

腕、胸、目、頬、腹、脚、全てを貫かれ、トリオン体が崩壊する。

煙幕、それが晴れた頃には少女はすでに姿を消していた。

「失敗……？」

「はい、交渉は失敗、挙句戦闘に入り手を出す間も無くトリオン体を潰されました。」

「それは風神を使っても、という事か？」

やはり城戸さんはそこを気にするのだろう。ブラックトリガー、それも俺の予知まで  
ついたのに負けた。信じたくないのだろう。もはや残りの手が少ないという状況で  
1つ手が潰れたのだ。

「はい。」

「迅、可能性として、敵対はどの程度あり得る。」

「今はもうかなり危ないです。それこそほんの少しのきっかけで全面戦闘に突入します。」

「三輪体を引いた方がいいでしょう。彼等は少し過剰なところがあります。下手をうてばボーダーが壊滅する、なんて時に三雲くんをつけている場合ではありません。」

…

城戸さんが此方を睨みつけ、沈黙が生まれる。

「わかった、下がれ、迅。」

「はい、失礼します。」

城戸さん背を向け、部屋を出ようと扉へとを伸ばす。

ビー！ビー！ビー！ビー！

《緊急連絡、未確認トリガーよりボーダー本部への攻撃が行われました。非戦闘員は護身用トリガーを起動し、シエルターへ避難してください。緊急連絡、未確認トリガーよりボーダー本部への攻撃が行われました。非戦闘員は護身用トリガーを起動し、シエル

ターへ避難してください。緊急連絡……」

「失礼します！司令！三輪隊が例のブラックトリガーと交戦！ベイルアウトしました！その後そのブラックトリガーから本部が攻撃を受けています！既にブラックトリガーは此方へ向かってきており、諏訪隊、鈴鳴第一隊、荒船隊、影浦隊、そして風間隊がベイルアウトしました！現在太刀川隊、冬島隊、二宮隊が交戦中、状況は芳しくありません！また、B級中位以下は既に避難勧告を優先させ、C級隊員には非戦闘員同様シエルターへの避難を伝えました。それと……」

駆け込んできた男が状況を述べ、口ごもる。

「どうした、他には何が起こっている！状況を全て話せ！」

城戸さんが男に怒鳴りつけ、先を話させる。

「先程から何度も連絡を試みているのですが……天羽隊員に連絡がつかません。」

声を震わせ、男がもう一人のS級隊員と連絡がつかない事を明かす

「なんだと……迅!!」

「無理です、俺は既にトリオン体が崩壊しているの再構築がまだ終わっていません。」

「なら天羽は!!」

やはり城戸さんには言うべきか……?

「迅!!」

迷っている場合ではないらしい。

「こうなつた以上、天羽は既に敗北しているでしょう。この未来ではもう無理です。ブラックトリガーは両方が敗北、天羽の方に關してはトリガーを没収されているはずで、今動かせるほかの風神を起動できる隊員も慣れない風神では相手に一撃でさえ入れられないでしょう。何せ相手は空を飛ぶ。住宅街に誘き寄せれても高く飛ばれてはガンナー系トリガーでしかダメージ入れられない、忍田さんでもノコノコ出ていけばすぐさま狩られてしまいます。」

それは、事実上の壊滅宣告であつた。

S級は既に両方討伐された上、片方は奪われ、A級上位でさえ足止め程度、忍田も狩られるとあれば希望は既に果てた。

全面戦闘など生易しい、これでは一方的な蹂躪だ。

シエルターとて既に安全が保障されているか怪しい。

遠征艇のトリオンもまだ充填不十分、要人の退路も、住人の保護も最早不可能。

「その、そうお前だ。鬼怒田と寺島、唐沢に迅と風神、忍田をハンガーへ連れていけ、ベイリアウトした隊員には物資をシエルターまで運ばせろ、迅、お前はハンガーへ物資



を運べ、飲食物、トリガー、をできる限り詰め込め。鬼怒田には情報遮断させ必要なトリガーの構成、設計情報を持ち出し他全ては破棄させろ。そして遠征艇にトリオンが溜まり次第脱出しろ。幸いあそこは最下層、そうそう見つからんだろう。私は戦闘に出る。行動しろ。」

「冬馬!!!」

太刀川が警告するも、冬馬もベイルアウトしてしまう。

「太刀川、ダメージレポート!!」

戦場では初めて聞く声に、太刀川は動揺する。

「司令……? 何してるんです!! 早く避難を!!!」

あまりの同様に命令を無視し、避難を勧める。

「太刀川さん、まずは被害報告が先だ!」

出水が太刀川を宥めるように命令の遂行を促す。

「あ、ああ。現在ブラックトリガーと交戦中、被害は冬島隊冬馬がベイルアウト、二宮隊は二宮を残しベイルアウト。太刀川隊は唯我がベイルアウトしました。状況はかなりギリギリです。」

「了解した。太刀川、お前は私と一緒に前に出る。出水、二宮は後ろから隙を見つけ次第打ち込め。冬島隊長は転移マーカ―の位置を視界表示しろ。」

「了解」

飛び回る少女を睨みつけ、走る。

「太刀川！旋空一本！合わせろ!!」

旋空を少女を挟むように打ち込む。

「旋空孤月」

左右から一本ずつ放ち、続けし太刀川にもう一度旋空を撃たせる。

「太刀川！もう一回旋空をうて！」

「旋空孤月」

挟むように放った旋空を避けるように上へ退避した少女めがけて太刀川が旋空を放った。しかしそれも届かない。

ヒュンツ！

鋭い音が聞こえ、太刀川は横を過ぎた少女を確認し、そこで意識が途絶えた。

「次。」

勝利に酔わず、ただただ作業を進める。

新しく顔に傷の有るおじさんがきたが、若い二刀使いの男を始末し、数を減らした。

ボーダー 残り、4人。